

全国盲ろう教育研究会 会報 第8号

2010. 3 発行
全国盲ろう教育研究会事務局

◆全国盲ろう教育研究会 第7回定期総会・研究協議会報告

2009年8月3日（月）・4日（火）、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所を会場に全国盲ろう教育研究会 第7回定期総会・研究協議会を開催いたしました。

特別支援学校の教員、福祉施設指導員、盲ろう児童生徒の家族、研究者、医療関係者など約80名（盲ろう児生・ボランティア・通訳者をのぞく）の方の参加がありました。



講演で大いに学び、実践報告に共感・感動し、8つのポスター発表に耳を傾けました。そして、ワークショップでは時間を惜しんで語り合うと共に貴重な見学や体験のひとつときををもちました。

定期総会および研究協議会の様子を紙面にてご報告致します。

●全国盲ろう教育研究会 第7回定期総会報告

会長挨拶後、出席者数・委任状数を報告・確認した後、議事案件の審議に入りました。

- ・議案1. 2008年度事業報告
- ・議案2. 2008年度会計報告
- ・議案3. 2009年度事業計画
- ・議案4. 2009年度予算

以上、原案通り、了承されました。

●全国盲ろう教育研究会 第7回研究協議会報告

<8月3日>

◇開会式 「会長挨拶」より

今回の研究協議会において、盲ろうの中学部・高等部の青年たち当事者が発表に関わるということが、大変意義のあることです。かつて合宿をしたことがあります。なかなかコミュニケーションがとれなかったことを思うと感慨深いものがあります。

また、当研究所にて開催し、研究報告をするということで、日頃の研究成果

の一端を紹介でき、嬉しく思います。

障害者の権利条約のインクルージョンという大きな流れに、異議をとなえた国際的団体が3団体（聴覚、視覚、盲ろう）あり、第24条のなかで、blind、deaf、deafblindが明記されました。日本語訳では「盲ろう」という語が入りませんでした。政府も理解を示してきていると聞いています。

また、国内においては、東京都が財政的なバックアップをして、東京都盲ろう者支援センターが開設しました。21世紀の特別支援教育の在り方に関するパブリックコメントに意見を寄せたことなどが実を結んできていますので、絶えず、行政に働きかけていくことが大切であります。

4年後に世界ヘレンケラー会議・盲ろう者大会が日本で開催され、世界各国から数百人が集まってくるので、それに向け、盲ろう者各団体が力を合わせていきたいと思えます。

◇講演概要

「実践につなぐ見え方アセスメント

～見えているかどうかわかりにくい子どもの光と色への反応をもとに～

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 齊藤 由美子 氏

中澤 恵江 氏

重度・重複障害のある子どもたちの中には「見えているのかどうかかわらない。聴覚中心で関わっているがそれで本当によいのか？」「明暗程度といわれてきたが、少し見えているような気もする。しかし何を見せたらよいのかかわらない。」と言われる子どもたちがいます。本講演では、見えているかどうかわかりにくい子どもたちを対象にした、光と色の視標を用いた見え方のアセスメントの紹介、評価結果を日々の実践へ活用する仕方について説明します。

①特別支援学校（肢体不自由）に在籍している子どもたちの多くは、さまざまな原因から脳に損傷を受け、複数の障害を受けています。視覚に何らかの課題があると担任が推測する子どもの割合が45%～60%にのぼっている学校もあります。眼球の問題が原因となっている視覚障害の場合もありますが、多くの子どもたちは中枢性の視覚障害を有していると推測されています。中枢性視覚障害は教育的・環境的な取り組みによってその状態が改善される可能性があります。中枢性視覚障害の特徴と、その状態の改善について説明します。

②中枢性視覚障害の特徴として、「完全に視覚がないことはまれであり光覚があること」「色知覚が比較的良いこと」「眩しさを感じる場合が多いこと」があります。このことから、アセスメントの道具として光視標と色視標を作成しました。懐中電灯に色ゼロファンのフィルターをつけた光視標、黒いうちわに蛍光色・普通色の紙を貼った色視標は、学校で容易かつ安価に調達できる素材であり、また、同じ素材を用いてアセスメントの結果を実践に結びつけやすいという利点があります。

* 光視標、色視標の選択と作成方法について紹介

③アセスメントでは主として以下のポイントをチェックします。

1) 子どもが見える視標の種類と大きさ、2) 楽に見える距離、3) 提示の方向と仕方、4) 眩しさへの配慮、5) 疲れの配慮、等々。

* アセスメントを行う際の手順、及び、配慮事項等について実践を交えながら説明

④アセスメントの結果は、日々の実践のなかで、具体的な教材の工夫や環境の配慮などにつなぐことができます。聴覚中心の関わりから見える色を活用し眩しさへの配慮を行った事例、蛍光色が見えることがわかり視覚を使って楽しむ美術の授業を展開していった事例、その他、子どもが見える光と色を使ったわかりやすい環境設定や、子どもが楽しめる教材の工夫等を紹介します。

* 映像を使いながらの紹介

講演いただいた研究成果は、以下のホームページに詳細が掲載されています。

http://www.nise.go.jp/kenshuka/josa/kankobutsu/pub_b/b-236.pdf

◇ポスターセッション

ポスターのテーマと発表者は以下の通りです。

①その後のヘリコプター

ヘリコプターの会

宮口 裕成・石田 良

子

②ろう学校に通う「盲ろう」のある生徒への白杖を使用した歩行訓練

埼玉県総合リハビリテーションセンター 水田 靖士

③加減算（数量）の学習教材

筑波大学附属久里浜特別支援学校 平良 英二

④盲ろう者本人が主催する指点字講習会 ～「あつはな会」の報告～

筑波大学附属視覚特別支援学校高等部 森 敦史

⑤柔道一直線 ～K君の今

広島県立広島中央特別支援学校 谷水 進二

⑥盲ろう教育における教員の専門性向上のための研究

国立特別支援教育総合研究所 中澤 恵江

筑波大学特別支援教育研究センター 星 祐子

⑦盲ろう疑似体験研修実施報告

横浜市立東俣野特別支援学校 三國 勝司

⑧東京都盲ろう者支援センターの機能と役割

東京都盲ろう者支援センター 前田 晃秀

<8月4日>

◇実践報告概要

「ろう学校における盲ろう生に対する指導と家庭および地域の豊かな取り組み」

奈良県立ろう学校 中村 淑子 氏

盲ろう児と家族の会 ふうわ 尾崎 伊佐子 氏

中村 淑子 氏

はじめに

実践報告をする盲ろう生〇君についての簡単なプロフィールは以下の通りです。

- ・1994（平成6）年11月生まれ
- ・奈良県立ろう学校中学部の3年生
- ・幼稚部（3歳時）より在籍
- ・網膜芽細胞種により、両眼を摘出、義眼を装用
- ・感音性難聴（聴力 右93dB、左91dB）
- ・コミュニケーション手段は触手話、触指文字、音声、点字

〇君は、日本ライトハウスからの日常的な支援や隣接する盲学校からの支援など、さまざまなネットワークの中で、支えられて生活しています。

尾崎 伊佐子 氏

家庭および地域の豊かな関わり

〇が、盲ろうになって10年、節目の年です。先輩たちの実践を後から追いかけてきました。

日本ライトハウスは、小学部2年生から利用しています。奈良県は、視覚障害者日常生活訓練施設がないため日本ライトハウスにお世話になってきましたが、年間5回という利用制限があるのが難点です。ライトハウスには、歩行訓練やパソコンの指導などをしていただいています。家庭生活における支援だけではなく、学校においても歩行の助言や手引き歩行の方法等についてアドバイスをしていただけたことはとてもよかったと思っています。パソコンについては、「メールでのやりとり」をねらいにして、指導を受けています。メールのやりとりの中で、日本語の獲得につながり、世界も広がるのではと考えていますが、使用方法の定着などの課題もあります。

地域では、障害者サポートセンター「にこにこ」を利用しています。月4～5回、30分から1時間ほど、講演への散歩やスーパーへの買い物などの福祉サービスを受けています。職員の方が手話や指文字などのコミュニケーションツールを持っていないため細かい会話がなかなか難しい、職員がよく替わるなどの課題がありましたが、障害者自立支援法の施行で少し積極的な対応になり始めています。指文字ができる職員の方にほぼ固定化され、ライトハウスの歩行訓練士さんと出かける機会を設けたり、長期の休み中に少し遠出をするなどの支援を受けています。

次に、トーマサの会についてです。大好きな機関車トーマスと名前を合わせて、トーマサとしました。見て・聞いて知ることが難しいので、意図的に体験させることをしてきました。小学部3年頃から活動を始め、2～3か月に1回程度、企画しています。参加者は、通訳介助者、盲ろう者、歩行訓練士さん、盲ろう者友の会のメンバーなどさまざまです。みかん狩り、さつま芋掘り、ポ

ーリング、環状線一周、ユニバーサルスタジオジャパンに出かけたり、皆が楽しめる活動を考えています。

また、奈良市体操協会ジュニア教室が主催しているトランポリン教室にも小学部3年生から通い始め、2か月に1～2回の教室を続けています。半周周り、右・左回り跳びなど、いろいろな跳び方を楽しんでいます。トランポリンの間には、マット運動やバトミントン、二人羽織のバトミントンなどにも挑戦しています。

そして、奈良盲ろう者友の会「やまとの輪」が2009年2月に設立されました。たとえば、金魚すくい、クッキー作り、クリスマス会など盲ろう児も盲ろう者も一緒に活動できるような企画を考えています。金魚すくいでは、13枚の「ぽい」で11匹すくえました。トーマサクッキーは、文化祭の時などに販売し、ちょっとした職業体験になっているようにも思います。

これからも関西人の乗りで、ネットワークを広げられたらいいなと思っています。

中村 淑子 氏

ろう学校における盲ろう生への日本語指導

盲ろう生の〇君を中学部で受け入れて3年目になります。〇君は、小学部の時に、50音の触指文字と点字の基本を習得しましたが、身に付いている語彙は少なく、身近な言葉に限られていました。また、助詞の使い方や日本語の構文も身に付いていないため、文章表記や読み取りなどは大変困難でした。

中学部では、こうした実態を受け、日本語の獲得にむけて、実物や体験したことを言葉と結びつけ、さらに文章化することで日本語の獲得を目指してきました。触手話による意味理解と音声と触指文字による韻の確認、点字での表記を行い、さらにその点字を読んで再認識することで日本語の定着を図ってきました。また、日常生活での情報保障において状況説明、状況通訳を的確にする中で言葉の獲得を目指してきました。

〇君の実態として、言葉の習得は身の回りの簡単な言葉にとどまっていることが多いため、国語の指導内容については生活に関連したものや小学校低学年程度の教材などを、実体験を通して理解したり、点字で読み取って触手話で意味を確認して読み深めたりするという方法で進めてきました。

教材については、市販の点訳本などを利用して行っていますが、絵本の種類も少ないため、実態に合わせて一般の絵本などを選定し、点訳して指導に生かしています。行事の作文や日々の記録なども、必要に応じて題材として取り上げ、〇君が手話と音声で表現する内容を確認しながら書き言葉に置き換えて、点字表記するという方法で進めています。

教材としては、市販本の「てんてん」、「たんぽぽ ぽぽたん」、「チョウチョウのおやこ」「ももたろう」など、自作教材では、「橋の上のおおかみ」、「くれよんのくろくん」、「コロちゃんとさわってあそぼ！」などを作成・活用しました。

今後に向けて、さまざまなコミュニケーション手段を使用した、日本語獲得への取り組みを継続していくこと、日常生活での状況説明や通訳を適切に行っていくこと、〇君自身は主体的な活動ができるよう働きかけをしていくこと、高等部への引き継ぎと学校卒業後の進路にむけた情報収集を行っていくことなどがあげられます。

◇ワークショップ報告

次の3グループに分かれ、見学・体験をしたり、協議を行ったりしました。

①見え方のアセスメント結果にもとづく疑似体験キットの作成と活用

②情報機器の説明と体験

～ライブメッセージャーを活用したチャット～

③盲ろう児童生徒を初めて担当したあなたへ

●見え方のアセスメント結果にもとづく疑似体験キットの作成と活用

前日に講演で学んだ「見え方のアセスメント結果」にもとづいて、見えと聞こえの疑似体験キットを作成しました。担当している子どもの見えと聞こえの状態を想定しての疑似体験では、「声は聞こえているけど、何を話しているのかわからないもどかしさがある」、「視野が狭いと、こんなに見たいものをみつけるのに時間がかかるとは思わなかった」などの感想があちこちから出されていました。

その後、研究所内の生活支援棟を見学し、子どもたちにとってわかりやすい、捉えやすい環境設定、日常生活用具の工夫などの数々を学びました。

●情報機器の説明と体験 ～ライブメッセージャーを活用したチャット～

<配布資料より>

1. Windows Live メッセージャーとは

手軽に楽しめる無料のインスタントメッセージャーソフトです。パソコンや携帯電話などで、友達や仕事仲間とチャットしたり、テレビ電話での会話、ファイルのやりとり、音楽・写真の共有などができる上、ゲームまで楽しめてしまう便利なソフトです。

2. チャットとは

一般のインスタントメッセージャーと同じく、テキストボックスに文字を入力し、エンターキーを押すか送信ボタンを押すことによって文字を送信することができます。なお、送信最大文字数は100文字まで。パソコン同士やパソコンと携帯電話などで、相互に文字を送受信することで、リアルタイムにテキストを媒体とした会話を楽しむことができます。

3. 盲ろう者のコミュニケーションツールとして

手話・指文字・指点字などの特殊な会話技術を持たない晴眼者や健聴者とのコミュニケーションに活用できる可能性があります。ただし、このシステムを使う盲ろう者はブレイルセンスを活用できることが必要です。相手となる晴眼者・健聴者はパソコンで通常の文字入力（漢字かな交じりで可能）ができれば大丈夫です。

実際に、パソコン用の「メッセージャー」というソフトを使って、おしゃべり（チャット）を体験しました。

●初めて盲ろう児生を担当したあなたへ

参加者 12名（学校関係者：7名、施設・作業所関係者：3名、

研究者：1名)、

参加者一人一人が自己紹介を兼ね、現在自分が関わっている盲ろう児者について、課題と感じている点などを出しました。

施設に入所、作業所やデイサービスを利用している先天性盲ろう者とのコミュニケーションの取りにくさ、学校教育において生活面での関わりが主となる寄宿舎での余暇の過ごし方などについての悩みが話されました。

コミュニケーションの取りにくさについては、「どうやってコミュニケーションを成立させるべきか?」といった手段や方法にこだわるのではなく、自分の目の前にいる盲ろう者の心情に近づけるきっかけを作ること、すなわち、人間関係の根幹を築くことを大切に考えることが重要ではないかとの意見が出されました。また、余暇に関しては、どの年齢層においても概して盲ろう児者は「楽しみ」が制限されてしまい、多くの活動を受動的な姿勢で受け入れざるをえないという現実があること、それを打破するためには、あえて特別なことを試みるのではなく、彼らが理解しやすい日常生活の中の日常的な活動を一緒に行う機会を多く共有するという意識を持つことが大切なのではないか、理由も告げられずに、単に待たされて結果だけを体験するのではなく、意味のある時間を共有することで、おのずとそこにはコミュニケーションが伴ってくるのではないだろうか、そして、その「意味のある時間」の中で、関わり手である私達自身が楽しみを分かち合える遊び心を持つ余裕を感じていたいと思うといった話しが出されました。

笑いの絶えない分科会でした。参加者一人一人の言葉に皆が耳を傾け、うなづきあう、わずかな時間ではありましたが、このようなうなづきあえる時間と機会こそが盲ろう児者を担当する私達には最も必要なのではないかと感じました。

【文責：中澤 恵江、三科 聡子】

◇先天性盲ろう児・者プログラム

2歳のK君を中心に、のんびりと気持ちのいいひと時を過ごしました。関わりにかくさんの笑顔としぐさで応えてくれるK君でした。

●運営委員会・事務局より

第7回定期総会・研究協議会にご参加の皆様、お忙しい中、ありがとうございました。ボランティアの方々をはじめとしまして、多くの方々には、多大なるご協力をいただきましたこと、心よりお礼申し上げます。皆様からいただいたアンケートでは、暖かなねぎらいや励ましのことばとともに、今後の運営に対しても貴重なご意見をいただくことができました。今後もより充実した研究協議会となるよう努めてまいりますので、今後ともご協力のほど、宜しくお願いたします。

●会費納入のお知らせ

会費（年2000円）納入にご協力ください。
・2009年度分までの会費納入がお済みでない方は、納入をお願いいたしま

す。

・納入状況は、宛名ラベルに記載しています。ラベル印刷後に納入された場合など、行き違いがありましたらご容赦ください。

・2010年度会費納入時期は、2010年4月1日～6月30日です。

◇振込・振替先（みずほ銀行、またはゆうちょ銀行をご利用ください）

みずほ銀行 本郷支店

口座番号 普通預金 8062806

口座名義 全国盲ろう教育研究会会計 柴崎 美穂

ゆうちょ銀行

口座番号 00100-6-484136

加入者名 全国盲ろう教育研究会

●連絡先変更等のある方は、お手数でも事務局までご連絡ください。

全国盲ろう教育研究会 第8回定期総会・研究協議会のお知らせ

日程：2010年8月8日（日）・9日（月）

場所：筑波大学附属視覚特別支援学校

（東京都文京区目白台3-27-6）